生存科学研究ニュース

Vol. 39, No.3　　2024.10 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518　fax: 03-3567-3608　email: office@seizon.or.jp　http: //seizon.umin.jp

臨床倫理支援の課題

専務理事　竹下　啓

私は、東海大学医学部付属病院で臨床倫理支援に携わっています。臨床倫理支援とは、医療従事者が日々の臨床で倫理的問題に気づき、適切に対応できるようにする活動で、臨床倫理コンサルテーション、院内倫理指針の作成、臨床倫理教育が含まれます。日本の病院における臨床倫理支援は病院機能評価を契機に普及したと言われており、臨床倫理を取り扱う倫理委員会(〇〇病院臨床倫理委員会や〇〇病院倫理委員会など呼称はいろいろ)が臨床倫理支援を担当している場合が多いことがわかっています。

臨床倫理支援の普及には、大きく 2 つの課題があります。ひとつは、質の担保です。臨床倫理支援体制の構造や支援のプロセスのあり方については一定の合意があり、いくつか成書も出版されています。しかし、アウトカムについては何を評価したらよいのか、それをどう評価したらよいのか、臨床倫理の専門家の間でも必ずしも意見は一致していません。プロセスについても、例えば臨床倫理カンファレンスを開催したときに、その内容を評価する定まった物差しはありません。もちろん、臨床倫理支援を一定の価値観で測定するのは不見識だという批判もあるでしょう。しかし、病床規模が大きな病院の多くで臨床倫理支援が行われている現在、臨床倫理支援の質とは何かを議論し、臨床倫理支援の質を向上させて行くことが必要でしょう。

医療安全の分野では、2000 年に国立大学附属病院における「医療安全・質向上のための相互チェック」が始まりました。2018 年には医療安全対策地域連携加算が設定されたことを受け、地域の病院でも同様の取り組みが広がっています。全国の臨床倫理支援担当者で組織している病院・臨床倫理委員会では、2024 年度から臨床倫理支援についての「病院間連携・相互評価プログラム」を開始しました。これは、臨床倫理支援担当者がお互いの病院を訪問し、臨床倫理支援について評価し合うことの取り組みです。実際のカンファレンスの内容などに直接触れることによって、リアルに臨床倫理支援の「質」を経験することで、「臨床倫理支援の質とは何か」という問いにも迫ることができると期待しています。

もうひとつの課題は、臨床倫理支援の均てん化です。病床規模が小さい病院の多くで、臨床倫理のための倫理委員会や臨床倫理コンサルテーションが未整備であることがわかっています。また、介護施設を含む在宅医療・ケアにおける臨床倫理支援については、個別の取り組みが報告されてはいますが、全体的な実態がどうなっているかはまだわかっていません。小規模事業所が多い在宅医療・ケアにおける臨床倫理支援、特に個別のケースに対する臨床倫理コンサルテーションは、地域の病院の臨床倫理支援担当者などが外部コンサルタントとして助言する形式や、ともに在宅医療・ケアに取り組む専門職が臨床倫理を学びピアサポートとして展開する形式が考えられます。

以上の課題解決には、人材育成が不可欠です。私が所属する東海大学では、「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」として、2024年度には大学院修士課程に「がん患者の倫理・社会的問題に対する支援者養成コース」を設置しました。ここで学んだ学生たちが、全国で臨床倫理支援を担う存在になってくれることを夢見ています。

(東海大学医学部教授)

「幼小接続期のカリキュラム作成についての研究」

研究責任者　宮城　利佳子

本研究会は、幼児・低学年児童のよりよい生活(well-being)の実現に対して教育的視野からアプローチするものである。具体的には、幼児期のあそび(＝学び)と低学年児童期の学び(＝あそび)を円滑に接続する教育の組織化に関して理論的・実践的に検討し、望ましいカリキュラムの在り方を考究することを目指している。2024年4月～9月までに3回の研究会を実施し、その成果を日本生活科・総合的学習教育学会第33回全国大会新潟大会(以下、新潟大会)で発表した。以下、研究発表の概要を示す。

新潟大会の様子

金城愛梨・山本銀兵・宮城利佳子・名渡山よし乃は「生活科における『保育ドキュメンテーション』の応用」という題目で研究発表をした。当研究は、幼児期の発達特性と関わりが深い低学年児童の学習の在り方に関する研究の蓄積がある生活科教育研究の文脈において、保育ドキュメンテーションの生活科への応用可能性を検討することを目的とした。小学校第1学年において保育ドキュメンテーションを取り入れた生活科実践に取り組む金城教諭の実践知を検証した。インタビューによって収集したトランスクリプトをSCATによって分析し、教師の実践経験を構成する概念を生成した(資料1)。

資料1

考察の結果、生成された構成概念は、ドキュメンテーションを作成していく段階や振り返る段階で、学習活動における子どものそれぞれの個人的な経験が集団的な経験に再構成され、個の学習履歴と集団の学習履歴が調和的に統合していく過程を含意していることなどが示唆された。今後の課題としては、教師の「負担感」に関わる問題群に関連するドキュメンテーションの体系的・構造的(組織的)な導入の方法について追求していくことなどが示された。

我謝友貴美・宮城・名渡山・金城は「子どもたちの育ちや学びをつなぐ―ドキュメンテーション活用による保護者への情報発信と受け止めの分析―」という題目で発表した。当研究は、保育所における我謝の1年間のドキュメンテーション実践の内容を、保育士・子ども・保護者の三つの視点から分析するものである(資料2)。

（1）子どもたちと作成したドキュメンテーション

～子どもたちと作成したドキュメンテーションの変化～

時期	作成者	子どもの姿	掲示場所	宛先
4月･5月	・保育士が中心	・好きな遊びの中で感じたことや気付いたことなどを言葉で伝え、保育士に書き入れてもらう。	・クラス内	・自分たち
6月前半	・保育士と子ども	・イラストやコメントを自分なりに書き入れる。自分のクラスだけの振り返りでなく、同じ遊びがきっかけで、他のクラスにもドキュメンテーションの内容を知らせる。	・玄関外 ・クラス内	・他のクラス
6月後半～3月	・子どもが中心	・友達と相談しながら、写真を配置したり貼ったりしている。自分なりの文字でかいたり、イラストをかき入れている。	・玄関外 ・クラス内	・保護者

資料2

保育士と子どもが年間を通して作成した32回(栽培活動9回、アイス研究7回、好きな遊び7回、園外保育5回、行事 4 回)のドキュメンテーションの内容をテキストマイニングを用いて分析し、さらにドキュメンテーションをカテゴリに分類し検定を行い、特徴を考察した。また、これらのドキュメンテーションをアプリ配信によって確認している保護者へのアンケート調査も行った。分析の結果、保育士と子どもが作成したドキュメンテーションは、子どもが「楽しい」と感じる活動が中心となっていることの他に、保育士が重要視していた「集団としての育ち」や「子ども同士の関係性」といったテーマを中心に構成されている傾向が明らかとなった。また、保護者へのドキュメンテーションの共有化は、保育所と家庭の架け橋となるだけでなく、子どもを真ん中に家庭が祖父母等とも共有することで子どもの成長へつながる事例が確認された。

以上のように、各人が個々の専門性に応じて幼児期と低学年児童期の学びの在り方についてアプローチしている。今後も引き続き、保育・教育の現場の子どもの姿、保育士・教師の取り組みに密着した研究を続けていく。

「全体として人を見る／診る／看ること」

研究責任者　齋藤　直子

医療において患者を診る時、教育において生徒を見る時、看護においてケアされる者を看る時、人を全体としてとらえるとはどういうことか。そして、どのような見方、寄り添い方が、全人的な成長、治癒、再生を促すことができるのか。教育、医療、看護にとって不可欠なこれらの問いに答えるべく、本研究会では医療・看護・教育・哲学・美術の専門家が科学と人文学の学際的知見を結集し、理論と実践をつなぎながら、人を全体として見

る／診る／看ることのあり方について議論し、その思想と実践の新たな方向性を提示することを目指している。三年目は、これまでの研究成果に基づき、また医療倫理と哲学の視座から臨床現場に関わっておられる新メンバーにも加わっていただき、哲学的視座と臨床的視座をつないで総括の研究を行なうこととなった。この概要に基づき、今年度は「いのち」を切り口として、メンバー自身が、体験をもとに具体的テーマを設定して発表を行うということになった。研究メンバーは、齋藤直子(京都大学大学院教育学研究科・教授) (研究責任者)、小島靜二氏(小島歯科クリニック・院長)、鈴木瞳氏(一宮西病院乳腺・内分泌外科・部長)、秋山知宏氏(総合地球環境学研究所上廣環境日本学センター・特任准教授／神戸情報大学院大学・客員教授／宮崎国際大学・客員教授)、中澤栄輔氏(東京大学　大学院医学系研究科・公共健康医学専攻・医療倫理学分野・教授)である。

今年度は合計六回の研究会を開催予定であるが、第二回研究会(2024 年 7 月 30 日開催)では、新メンバーの中澤栄輔会員に「公衆衛生の倫理と自律」と題する発表をしていただいた。中澤氏のバックグラウンドは哲学、倫理学で、現在の専門は、医療倫理、臨床の倫理、研究の倫理、公衆衛生の倫理である。前半では、公衆衛生倫理に焦点を当て、公衆衛生政策における人格と自律性理解について話がなされた。公衆衛生倫理とは、公衆衛生における価値どうしのコンフリクトの調整のための学、およびその実践であり、自由と公共善を正義の天秤ではかることがなされている。後半では、臨床倫理に関わる問題として「関係的自律性」が論点であった。医療倫理においては、自律性の個人主義的解釈が自己決定の問題を十全に扱えないのではないかという観点から、「関係的自律性」という考え方が、提起されるようになっている。これは、自律性を社会的、環境的な文脈において存在する個人の文脈で捉え直すもので、自律性は患者が有する関係性のなかで再解釈され、関係性のなかで患者の人格がたち現れることになる。また関係性は現在の空間的な拡がりのみならず、過去と未来に時間的に拡がる。個人とコミュニティという観点からとらえられてきた医療倫理に、過去と未来という時間軸を入れ、環境という空間的広がりを入れることが、中澤氏の取り組んでいきたいアプローチである。(図 1)

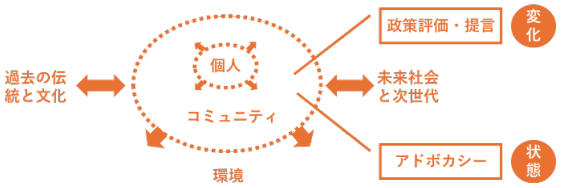


図 1

第三回研究会（2024 年 8 月 27 日開催）では、メンバーの秋山知宏氏が「私たちを人間たらしめるものは何か：人類と自然の統合的探究」と題する発表を行った。秋山氏は、地球環境問題の解決を志し、人類と自然の健全な未来のために、統合学と統合的実践に取り組んでいる。本発表の問いは、「私たちを人間たらしめるものは何か」であり、人間の存在や認識に関わる根本問題の一つである。この問いを統合的に考察した研究は少ない。本研究では、この問いに関わる論文を Web of Science を用いて収集し、それらを材料として、この問いを統合的に考察する。研究方法は、ケン・ウィルバーの四象限的な統合的枠組み――個と集団の内面と外面という四つの異なる視点――を用いる。これにベン図を組み合わせ、先行研究のレビューをもとに、結果を導き出すことが目指された。秋山氏の発表は、人間を人間たらしめているものをあくまで科学的に解明しつつも、そこに「倫理」と言われるものが分かちがたく埋め込まれていることへの気づきを誘うものであった。また、人間は欲望に駆り立てられ地球や環境を破壊する罪深き存在であると同時に、それを乗り越えることができるのもまた人間のみであるという点で、善悪を超える地平を示すものであった。さらには、自己超越を可能にするものは何らかのメカニズムとして科学的に解明しうるのかもしれないが、同時に、そうした欲望の方向転換を可能にする対話や教育の大切さへの気づきを喚起するお話しでもあった。(図 2)

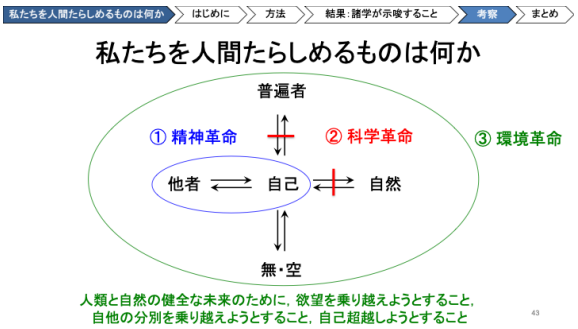
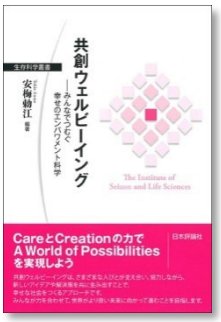


図 2

2024 年 11 月には、第四回研究会として、秋山氏に臨死体験についてお話しいただく予定である。また 12 月開催予定の第五回研究会では、小島氏と鈴木氏に「いのち」についてお話しいただく予定である。2025 年 2 月の総括会議では、ゲストスピーカーのPaul Standish氏(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所・教育哲学部門長・教授／同研究所哲学センター・所長／イギリス教育哲学会・終身会長)と齋藤が、「死ぬことを学ぶこと」を主題に総括発表を行う予定である。これらの研究会を通じて、全体として人を見る／診る／看ることの重要性と、決して「全体」を見ることなどできないということのパラドクスを、領域を超えた対話を通じて解明してゆく所存である。

会　員　新　刊　書

【生存科学叢書】
『共創ウェルビーイング
―みんなでつむぐ幸せのエンパワメント科学』
編　　著　　安 梅　　勅 江
日本評論社　　定価 2, 600 円+税



ウェルビーイングは安寧、幸福、健康、福祉などと訳され、長い間、個人の幸福として論じられてきました。しかし人はひとりでは決してウェルビーイングを実現し維持することはできません。人は誰かと共に、そして環境と共に在ることで初めてウェルビーイングを達成できるのです。まさに人間の生存は、**他者や環境と共に存在する共創的なウェルビーイング**によって支えられています。

私たちは、さまざまな人びとが共に生きる幸せを目指す**共創ウェルビーイング Co-Creative Wellbeing** に注目しています。共創ウェルビーイングは、**自分、他者、環境に思いを寄せる、大切にするケア Care** と、**互いの違いを楽しみつつ共によりよい未来を築くクリエーション Creation** に基づくウェルビーイングです。

共創ウェルビーイングは、人びとが協力し一緒に創り上げる新しい幸せの形です。本著を通じて組織や地域がさらに輝き、一人ひとりが誇りを持ちながら未来に向かって共に歩む共創ウェルビーイング世界への扉を開くことを願っています。　　(筑波大学　安梅　勅江)

事　務　局　だ　よ　り

2025 年度自主研究事業・自主研究事業(若手研究者)および助成研究事業の募集を開始しました。

【自主研究会：一般部門・若手研究者部門】

＜研究の趣旨＞

「生存科学」は人類の健全な生存の基盤を構築することを目指す新しい総合科学である。

人類の健康の維持と増進に関する研究、環境、生態、経済、福祉、文化など生存科学に関する研究など、「生存科学」の推進に寄与する研究とする。また、当財団の理念である「生存の理法」を理解する知識の普及、提言および社会への啓発活動の研究などとする。

研究を実施するにあたり、研究会を組織すること。なお、研究会は、研究申請者が研究会責任者となり、研究メンバーは 3 名～4 名以上で構成する。

＜応募対象者：一般部門＞

生存科学研究所の<u>個人会員</u>であること。

なお、賛助会員への新規入会手続きと同時進行中の場合も対象とする。

＜応募対象者：若手研究者部門＞

生存科学研究所の<u>個人会員</u>であること。

なお、賛助会員への新規入会手続きと同時進行中の場合も対象とする。

研究会責任者および研究会メンバー計 3 名以上は、男性 40 歳女性 45 歳以下とする(2025 年 3 月 31 日時点)。

【助成研究等】

＜助成の趣旨＞

「生存科学」は人類の健全な生存の基盤を構築することを目指す新しい総合科学である。当財団は、生存科学の発展に関する事業を行い、人類の豊かな生存環境の実現、振興に寄与することを目的とする。この目的を達成するために、生存科学に関する学術的な普及、提言および社会への啓発に関連する研究に助成を行います。

基礎医科学・臨床医学・社会医学・保健科学、人類の健康の増進と教育等に関する研究およびシンポジウム、公開講座の開催などに助成を行います。

＜応募資格＞

我国の大学またはそれに相当する研究機関等において、上述分野の研究を主導的に実施している個人またはグループを助成の対象とする。

募集期間：2024 年 10 月 11 日(金) - 11 月 29 日(金)

申請方法：<u>ホームページ</u>(http://seizon.umin.jp/index.html) より申請書をダウンロードの上、事務局にメールで申請する。

選考方法、選考結果の通知：

当財団の選考委員会において慎重に審査し、理事会に諮り決定する。

選考の結果は、2025 年 3 月中に申請者に通知する。なお、申請書は採否に関らず返却しない。

採否の理由についてのご質問には応じません。

問合せ先および申請書提出先：

公益財団法人 生存科学研究所
〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1
聖書館ビル 3 階
T E L: 03-3563-3518 F A X: 03-3567-3608
E-mail: office@seizon.or.jp
U R L: http://seizon.umin.jp/

研　究　会　等　日　報

7月29日(月)	「透析導入の共同意思決定における患者の経験」研究会
8月27日(火)	「全体として人を見る／診る／看ること」研究会
9月 3日(火)	40年史編纂委員会開催
9月14日(土)	40年史編纂会議
9月17日(火)	生存科学叢書打合せ会議
9月20日(金)	ファミリー・ウェルビーイングとエンパワメント　～だれ一人取り残さない未来のための挑戦～
9月24日(火)	40年史編纂委員会開催
10月11日(金)	2025年度自主研究・助成研究募集開始 10/11(金) - 11/29 (金)
10月15日(火)	40年史編纂委員会開催
11月 5日(火)	2024年度自主研究ヒヤリング開始